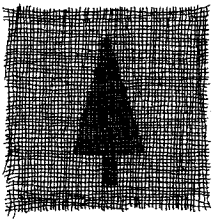
KIMIGATAME
RUNONONIID
WAKANATUM
NAGAKAR
AMIKOKOROMOSHIRZU
AIMITENONO TIN
RONI KURA BURE
SHIW A MO
OMOWAZARIKERI
KOISTYOU WAGANA
AKITATINIKERI HIT
UKOSO OMOI SOMESI
TIGIR KINA

美しい恋の物語

ちくま文学の森 1

筑摩書房



美しい恋の物語 〈ちくま文学の森1〉

一九八八年二月二十九日 第一刷発行
一九九五年四月 十 日 第一八刷発行

編 者 安野光雅（あんの・みつまさ）
森毅（もり・つよし）
井上ひさし（いのうえ・ひさし）
池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 森本政彦

発行所 株式会社 筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三 〒一一一
振替〇〇一六〇―八―四一二三

装 本 安野光雅
印刷所 三松堂印刷
製本所 鈴木製本所

本書の定価はカバーに表示してあります。
ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三一 大宮市櫛引町二―六四 筑摩書房サービスセンター
TEL ○四八―六五一―〇〇五三

©M. ANNO T. MORI H. INOUE O. IKEUCHI
1988 Printed in Japan

ISBN4-480-10101-2 C0393

目次

▲

初　恋……島崎藤村……2

▲

燃ゆる頬……堀　辰雄……5

初　恋……尾崎　翠……23

柳の木の下で……アンデルセン　大畑末吉訳……33

ラテン語学校生……ヘッセ　高橋健二訳……63

隣の嫁……伊藤左千夫……113

▲

未亡人……モーパッサン　青柳瑞穂訳……155

エミリーの薔薇……フォークナー　龍口直太郎訳……167

ポルトガル文……リルケ訳　水野忠敏訳……189

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

肖像画……A・ハックスリー　太田稔訳……237
藤十郎の恋……菊池　寛……263
ほれぐすり……スタンダール　桑原武夫訳……291
ことづけ……バルザック　水野亮訳……319
なよたけ……加藤道夫……343
ホテル・ヴェリエール　解説にかえて　安野光雅……456

美しい恋の物語

初恋

島崎藤村

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃(さかづき)を
君が情(なさけ)に酌(く)みしかな

林檎畠の樹(こ)の下に
おのづからなる細道(ほそみち)は
誰(た)が踏(ふ)みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

燃ゆる頬（ほお）

堀　辰雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

堀辰雄（ほりたつお）　一九〇四（明治三七）―一九五三（昭和二八）　東京麹町生まれ。高校から大学時代に神西清（じんざい）、室生犀星、芥川龍之介を知る。関東大震災で母を失う。フランス現代文学に親しみ、コクトー、アポリネール、ラディゲを翻訳。処女作は「ルウベンスの偽画」。ついで「聖家族」「美しい村」。結核を患い、昭和十年代を信州富士見、信濃追分ですごす。「風立ちぬ」「かげろふの日記」はこの間の作。戦中から戦後にかけて、立原道造、福永武彦などの若い世代に強い影響を与えた。「燃ゆる頬」は昭和七年執筆。

私は十七になった。そして中学校から高等学校へはいったばかりの時分であった。

私の両親は、私が彼等の許であんまり神経質に育つことを恐れて、私をそこの寄宿舎に入れた。そういう環境の変化は、私の性格にいちじるしい影響を与えずにはおかなかった。それによって、私の少年時からの脱皮は、気味悪いまでに促されつつあった。

寄宿舎は、あたかも蜂の巣のように、いくつもの小さい部屋に分れていた。そしてその一つ一つの部屋には、それぞれ十人余りの生徒等がいっしょくたに生きていた。それに部屋とは云うものの、中にはただ、穴だらけの、大きな卓が二つ三つ置いてあるきりだった。そしてその卓の上には誰のものともつかず、白筋のはいった制帽とか、辞書とか、ノオトブックとか、インク壺とか、煙草の袋とか、それらのものがごっちゃになって積まれてあった。そんなものの中で、ある者は独逸語の勉強をしていたり、ある者は足のこわれかかった古椅子にあぶなっかしそうに馬乗りになって煙草ばかり吹かしていた。私は彼等の中で一番小さかった。私は彼等から仲間はずれにされないように、苦しげに煙草をふかし、まだ髭の生えていない頬にこわごわ剃刀をあてたりした。

二階の寝室はへんに臭かった。その汚れた下着類のにおいは私をむかつかせた。私が眠ると、そのにおいは私の夢の中にまで入ってきて、まだ現実では私の見知らない感覚を、その

夢に与えた。私はしかし、そのにおいにもだんだん慣れて行った。
こうして私の脱皮はすでに用意されつつあった。そしてただ最後の一撃だけが残されていた。……

ある日の昼休みに、私は一人でぶらぶらと、植物実験室の南側にある、ひっそりした花壇のなかを歩いていた。そのうちに、私はふと足を止めた。そこの一隅に簇(むら)がりながら咲いている、私の名前を知らない真白な花から、花粉まみれになって、一匹の蜜蜂の飛び立つのを見つけたのだ。そこで、その蜜蜂がその足にくっついている花粉の塊(かたま)りを、今度はどの花へ持っていくか、見ていてやろうと思ったのである。しかし、そいつはどの花にもなかなか止まりそうもなかった。そしてあたかもそれらの花のどれを選んだらいいかと迷っているようにも見えた。……その瞬間だった。私はそれらの見知らない花がいっせいに、その蜜蜂を自分のところへ誘おうとして、なんだかめいめいの雌蕊(めしべ)を妙な姿態にくねらせるのを認めたような気がした。

……そのうちに、とうとうその蜜蜂はある花を選んで、それにぶらさがるようにして止まった。その花粉まみれの足でその小さな柱頭にしがみつきながら。やがてその蜜蜂はそれからも飛び立っていった。私はそれを見ると、なんだか急に子供のような残酷な気持になって、いま受精を終ったばかりの、その花をいきなり搾(むし)りとった。そしてじいっと、他の花の花粉

を浴びている、その柱頭に見入っていたが、しまいには私はそれを私の掌で揉みくちゃにしてしまった。それから私はなおも、さまざまな燃えるような紅や紫の花の咲いている花壇のなかをぶらついていた。その時、その花壇にT字形をなして面している植物実験室の中から、硝子戸ごしに私の名前を呼ぶものがあった。見ると、それは魚住と云う上級生であった。

「来て見たまえ。顕微鏡を見せてやろう……」

その魚住と云う上級生は、私の倍もあるような大男で、円盤投げの選手をしていた。グラウンドに出ているときの彼は、その頃私たちの間に流行していた希臘彫刻の独逸製の絵はがきの一つの、「円盤投手」と云うのに少し似ていた。そしてそれが下級生たちに彼を偶像化させていた。が、彼は誰に向っても、いつも人を馬鹿にしたような表情を浮べていた。私はそういう彼の気に入りたいと思った。私はその植物実験室のなかへ這入っていった。

そこには魚住ひとりしかいなかった。彼は毛ぶかい手で、不器用そうに何かのプレパラアトをつくっていた。そしてときどきツァイスの顕微鏡でそれを覗いていた。それからそれを私にも覗かせた。私はそれを見るためには、身体を海老のように折り曲げていなければならなかった。

「見えるか?」

「ええ……」

私はそういうぎごちない姿勢を続けながら、しかしもう一方の、顕微鏡を見ていない眼でもって、そっと魚住の動作を窺っていた。すこし前から私は彼の顔が異様に変化しだしたの

に気づいていた。そこの実験室の中の明るい光線のせいか、それとも彼がいつもの仮面をぬいでいるせいか、彼の頬の肉は妙にたるんでいて、その眼は真赤に充血していた。そして口許にはたえず少女のような弱々しい微笑をちらつかせていた。私は何とはなしに、今のさっき見たばかりの一匹の蜜蜂と見知らない真白な花のことを思い出した。彼の熱い呼吸が私の頬にかかって来た。……

私はついと顕微鏡から顔を上げた。

「もう、僕……」と腕時計を見ながら、私は口ごもるように云った。

「教室へ行かなくっちゃ……」

「そうか」

いつのまにか魚住は巧妙に新しい仮面をつけていた。そしていくぶん青くなっている私の顔を見下ろしながら、彼は平生の、人を馬鹿にしたような表情を浮べていた。

五月になってから、私たちの部屋に三枝と云う私の同級生が他から転室してきた。彼は私より一つだけ年上だった。彼が上級生たちから少年視されていたことはかなり有名だった。彼は瘠せた、静脈の透いて見えるような美しい皮膚の少年だった。まだ薔薇いろの頬の所有者、私は彼のそういう貧血性の美しさを羨んだ。私は教室で、しばしば、教科書の蔭から、

彼のほっそりした頸を偸み見ているようなことさえあった。

夜、三枝は誰よりも先に、二階の寝室へ行った。

寝室は毎夜、規定の就眠時間の十時にならなければ電灯がつかなかった。それだのに彼は九時頃から寝室へ行ってしまうのだった。私はそんな闇のなかで眠っている彼の寝顔を、いろんな風に夢みた。

しかし私は習慣から十二時頃にならなければ寝室へは行かなかった。

ある夜、私は喉が痛かった。私はすこし熱があるように思った。私は三枝が寝室へ行ってから間もなく、西洋蠟燭を手にして階段を昇って行った。そして何の気なしに自分の寝室のドアを開けた。そのなかは真暗だったが、私の手にしていた蠟燭が、突然、大きな鳥のような恰好をした異様な影を、その天井に投げた。それは格闘か何んかしているように、無気味に、揺れ動いていた。私の心臓はどきどきした。……が、それは一瞬間に過ぎなかった。私がその天井に見出した幻影は、ただ蠟燭の光りの気まぐれな動揺のせいらしかった。なぜなら、私の蠟燭の光りがそれほど揺れなくなった時分には、ただ、三枝が壁ぎわの寝床に寝ているほか、その枕もとに、もうひとりの大きな男が、マントをかぶったまま、むっつりと不機嫌そうに坐っているのを見たきりであったから……

「誰だ？」とそのマントをかぶった男が私の方をふりむいた。

私は惶てて私の蠟燭を消した。それが魚住らしいのを認めたからだった。私はいつかの植物実験室の時から、彼が私を憎んでいるにちがいないと信じていた。私は黙ったまま、三枝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com